もう一度めぐるタマシイ

仁科柚希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
もう一度めぐるタマシイ

【Ｎコード】
Ｎ８２２６Ｅ

【作者名】
仁科柚希

【あらすじ】
自殺した筈だった。なのになんで、もう一度新たな人生を歩まなくちゃなんないの？！ちょっと天使！あたしはそんなの認めてないんだから！勝手すぎるのよ！もう、絶対にあんた天使じゃなくって悪魔でしょ！！＜世界中でたった１人＞の続編です。前作を読んでいらっしゃらなくても大丈夫なものを目指しているつもりですが、読んでいただいた方がよりお楽しみいただけると思います。

プロローグ：終わらない生（前書き）

楽しんでいただければ幸いです。

プロローグ：終わらない生

自分は死んだ筈だった。確かにあの時、毒薬入りの紅茶を飲んだはずだったのに。

何故。何故意識があるの？

今、目の前に広がっている世界は何？

真っ白な空間に沢山の人間があふれている。その中を、翼を生やした子どもたちがファイルを持ってうろついている。天使と呼ばれているような、そんな存在がいる。

現実ではまずありえない光景。

死後の世界。そんな言葉が頭の中でグルグル回る。

「どういうこと……？そんな、こんなのありえない……」

「あなたは死んだのよ、片瀬紅理（かたせあかり）さん。お望み通り、ね。

全く、どうしてこうなのかしら？あなたの持つタマシイ、そのタマシイの過去の所有者たちもみんなあなたと同じ様にことごとく自殺してるのよね」

あたしの前で天使―それもひときわ大きな翼を持っている、がいきなり喋りだす。可愛らしい少女の容貌をした天使は、いきなりで混乱しているあたしなどお構いなしで話を続ける。

「でもねぇ、あんまり自殺ばっかりされてるとタマシイが穢れてツカイモノにならなくなっちゃうの。つまり、輪廻の輪に戻せなくなっちゃうのよ。

フツー、そういうタマシイは破壊して終わりなんだけどね。今回はそうもいかないの。あなたのタマシイが自殺を繰り返すようになったのは私たちの不手際でもあるから、‘破壊してハイ終わり’っていうことはできないの。

で、次に自殺しちゃったらもう二度と輪廻の輪に戻せなくなっちゃうし、今回に限って特別措置をとることになったわけよ。

具体的に説明すると、通常のタマシイは記憶を消して輪廻の輪に

戻されるんだけど、今回は記憶を消さずに新しい人生を歩んでもらうことになったわ。あなたが死んだ十四歳の時からいきなりね。そうしないと違和感がありすぎるもの」

ペラペラと能天気に喋り続ける天使の話しが、少しは理解できたあたしは、大急ぎで口を挟む。

「ちょっと待ってよ！何勝手に決めてるの！あたしは新しい人生が歩みたいだなんて言ってないッ！このタマシイが破壊されようがどうなろうがどうでもいいのッ！そんなのイヤ！！」

ひょっとしたら単なる夢かも知れない。でも夢で片付けるにはあまりにもリアリティが有り過ぎて不可能だし、夢じゃなかったときに悔やんでも悔やみきれないだろうから頑張って主張する。

もう一度生きるだなんて苦痛以外の何ものでもない。生きていたくなかったから自殺した。なのに……、なのにどうして。

「イヤって言われてもね。上が決めちゃったから。そりゃ私もここでウロウロしてるのに比べれば偉いけど、所詮はしがない中間管理職。上の決定には逆らえないのよ」

「何人間臭いこと言ってんの！何とかしてよ、天使でしょ！」

「いや～、天使とか神の使いとか言われてるけど実際は下っ端。人間たちに神と呼ばれる存在、その中でも輪廻の輪を司ってるのに使われてるワケよ。

今回のことは異例中の異例で輪廻の輪担当以外のお偉いさんも総出の会議でバッチリ決まっちゃったの。神様には逆らわないほうがイイでしょ。ほら、アレよ。あなたの国の諺にもあるでしょ、長いものには巻かれろって」

涼しい顔して言ってのける天使が、悪魔のように見えてくる。

「あたし、その諺大ッ嫌い！！」

「なんてこと言うの、先人の教えを無にしちゃダメよ。それにね、ハッキリ言わせてもらえば、どうして私の担当地区にあなたみたいな面倒なのがくるの？もうこれ以上の面倒事は御免よ」

「この面倒くさがりッ！悪魔ッ！鬼ッ！人でなしッ！！」

「そりゃそうよ。私、人じゃないもの。
てことで、新たなスタートを切るのも日本だし、たまには様子見に行くし、大丈夫だから。一応あなたは記憶喪失でこれまでのことは何にも憶えてないって設定になってるから。で、天涯孤独で一人暮らし。ま、そゆコトで。
じゃ～ね、バイバイ」
「バイバイじゃな～い！！！！！」
それと同時にあたしは意識を失った。

～＊～＊～＊～

「それにしても、一回自殺してれば二回目はナイだろうなんて安易な考えでホントに平気なのかしら？結構根が深そうなのになぁ、彼女の過去は」
後に残された天使は呟く。
「あ～、でも何とかしろって言われてるしなぁ。どうしたらいいのかしら？もう、いい加減にもほどがあるのよ、あの上司は」
悪態を吐きつつ、天使はこれからを思って憂鬱だった。
未来が少女にとっても、自らにとっても幸せであることを祈りながら、天使は天を仰ぐ。そこに広がるのは人間の世界とは違って、ただただ白いばかりの空間だったけれども、少しは心が軽くなる気がして。

プロローグ：終わらない生（後書き）

前作が物凄く暗くなってしまったので、今回は多少なりとも明るくする予定です。あと、今回は少しファンタジーな感じにしてみたのですが……。どうなんでしょう、コレ。なんか天使の性格が色々と難アリなんですが、悪いコじゃないんです。今回天使におされ気味で主人公が目立たなかったんですけど、悪いコじゃないんです。

次はもうちょっと紅理がメインになるはずなので読んで頂けると非常に嬉しいです。私が。

最後のこんな駄文まで読んでいただきありがとうございました。

第一話：始まりのハプニング

気が付くとあたしはクリーム色のソファの上で眠っていた。窓の外から見える景色と部屋の中の様子からして、ここはマンションの一室らしかった。

ひょっとしたら、ここが新たな人生を送るにあたっての住居になるのかも知れない。

そう思うと部屋のことが気になって、色々と見てまわることにした。

まず元からあたしがいたリビングダイニング。キッチンには一通りの調理器具がそろっている。その他に家電もある。冷蔵庫に電子レンジ、炊飯器、クーラー、電話、テレビ。暮らしていくのに困らない程度のものはそろっている様だった。クリーム色を基調としたインテリアで、部屋の中は整えられている。

次に隣の部屋に移る。そこは寝室というかなんというか、まぁ女子中学生のお部屋という印象だった。ブルーを基調としたすっきりとした部屋。可愛い、けれど甘すぎずちょうどいい。勉強机やベッドが並び、本棚には生前？あたしが好んでいた本やマンガがあった。洋服ダンスの中も同様で、前に着ていた服が詰まっている。ＣＤコンポやパソコンまである。それなりに設備はイイらしい。

どちらの部屋もあたしの好みに合うもので、あの天使が手をまわしたんだろうと思うとなんだか複雑な気分になった。

そんな気分のまま部屋巡りを続けようとした時、能天気な声が聞こえた。

「やほっ、紅理！私が用意した部屋は気に入ってもらえたかしら？気に入ってもらえたら嬉しいわ。なんてったって残業して、よ～くあなたのこと調べてから、これまた残業してこの部屋を整えたんだもの。大変だったわ～」

天使だった。

「アンタ、本当に我が道を行くタイプね。ついていけないんだけど」
天使と呼びかけるのは、彼女は悪魔だと確信しているあたしにとっては大変不本意なため、アンタ、と呼ぶ。
「もう、アンタだなんてそんな呼び方ってないわ。私はエミリアよ。これから長いお付き合いになるんだから、もっと仲良くしましょ」
頭の高いところでポニーテールにされている金色の髪を、ふわふわ揺らしながらエミリアは訴える。
「一人で言ってれば？あたしはまだ新たな人生歩むこと承知してないし、これからもするつもりないから。さっさとあの真っ白なところに戻して」
さっきは思わず乗り気な感じでウチの中を見てまわってしまったけれど、あたしの決意はいまだ変わらない。変えるつもりはない。絶ッッッッッッ対に変えない。
「だから無理って言ってるでしょ？これから紅理は水瀬紅理（みなせあかり）として生きてってもらわなきゃならないんだから。
母一人子一人の母子家庭で育った紅理は、先日お母さんと一緒に交通事故にあって、お母さんだけ他界。紅理は何とか助かったケドその代償として今までの記憶を失うの。で、お母さん以外の親戚がいない天涯孤独な紅理はここで一人暮らしをはじめるってワケ。こういう設定になってるから、憶えといて」
「ちょっと何その名前とか。一文字変えただけじゃない。しかもあたしまだ十四歳なのよ、普通は養護施設に入るでしょ。この設定穴だらけなんだけど」
そんなのどうでもいい筈なのに、思わずツッコミを入れてしまう。
「一文字変更の方が憶えやすくてイイでしょ？養護施設は紅理が死ぬ気で拒否したコトになってるわ」
「そんなの無茶苦茶よ」
「無茶苦茶じゃないわよ。それに私がどれだけの手間をかけて準

備したと思ってるの？文句言わない」
「頼んでないし。そんな恩着せがましく言われても困るんだけど」
なんだかエミリアに流されている気がする。向こうでもそうだったけど、もう完璧にエミリアのペースだ。
「ねぇ、こっちでまた自殺ってアリなのよね？」
埒があかないと思ったあたしは、自分で行動を起こすことにした。
そう言いながら、ベランダまで走っていく。
「ナシ！絶対ナシッ！」
エミリアもあたしが何をしようとしているのかを察して、後を追ってくる。
ベランダの柵に足をかけて飛び降りようとしたところで、エミリアに追いつかれて必死で引き戻される。でも、あたしも負けずに柵にしがみつく。
「放してッ！はーなーしーてーッ！」
「ダメ！絶対ダメ！そんなこと許しませんッ！」
ベランダは大騒ぎだった。あたしもエミリアも自分の意志を貫こうと必死だ。
「おい。お前ら何やってんの？しかもそっちのチビの方、何生やしてんだよ。翼か？」
その声は唐突に聞こえてきた。どうやら隣から聞こえたらしい。ベランダを隣と区切っている金網の向こうにいる、あたしと同い年くらいの男の子があたしとエミリアを見ていた。
それはまぁいい。良くないけどいい。問題はエミリアが（あたしは絶対に認められないけど）天使で、背中に翼が生えているということ。そしてそれを隣に見られたということ。
「み、見間違いでしょ。何にも生えてないよ」
一応、抵抗を試みる。無駄だと思うけど。
「いや、どう見ても生えてるから。見間違いじゃない」
やっぱり無駄だった。
「エミリアッ！このドジ！間抜け！どーすんのよ！」

「ごめんなさ〜い！！」
思わずパニクッて叫んだけど、状況は変わらない。
よりにもよってお隣さんに見られるなんて。
ついてないとかそういう次元の問題じゃない。
だから世の中なんて大ッ嫌いなんだ。
「説明するから、だからこのことは絶対に秘密にして」
疲れたようにあたしは言った。イヤ、まぁ実際にかなりの疲労感その他に襲われているわけなんだけど。

〜＊〜＊〜＊〜
「だから、何度も言ってるじゃない。あたしはあの片瀬紅理なんだって。父親が浮気して、その所為で母親がおかしくなって、虐待されるようになって、挙句の果てに嫉妬に狂った母親が父親を殺したところを目撃したっていうあの片瀬紅理なんだってば。
そんで、つい最近自殺したあの片瀬紅理なんだって」
「へぇ〜。で、俺にその、実は自分は昔有名になって、つい最近も週刊誌を自殺したとかで騒がせてた片瀬紅理で、そこにいる天使にもう一度人生やり直せと連れてこられたって話を信じろと？」
皮肉たっぷりな感じで目の前の男の子に返される。
あれから説明する為に、彼をウチに上げた。そして、エミリアと二人でなんとかして説明しようと試みた。
その結果だ。
「そんなこと言われてもさ。本当なんだもの、仕方ないじゃない。常識で考えれば信じらんないのも無理ないと思うけど、ほらここにいる自称天使とかもう常識の範疇内じゃないでしょ？さっき確認した通り、この翼本物だし」
「自称天使なんてヒドイわ」
「だって性格悪魔でしょ」
エミリアの文句にサラッと切り返す。
「じゃあ、百歩譲ってお前たちの話を信じよう。それで、さっき

は何してた？」
「自殺しようとしてた」
「それとめてた」
あたしとエミリアで答える。
「何でそんなことしてんだよ？」
「だってあたし、新しい人生なんて歩みたくないのに無理矢理こういうことになっちゃうから。もう一度自殺しちゃえばいいかなって思ったの」
「それに関しては色々といいたいことあるけど、まぁおいといて。なんでそれなら新しい人生なんて歩むことになったんだよ？」
その問いにエミリアはあたしに話したようなことを答えた。
「その私たちの不手際ってのは何なんだ？」
「あ、確かに。あんたたち何やらかしたのよ？」
彼の問いにあたしも同調する。それの答えはあたしも聞いていない。聞く余裕もなかったし。
「あ～、それは……。簡単に言うとそのタマシイのず～っと前の所有者が私たちとごたごたしちゃって色々あって、すごく人生に絶望しちゃったのよ。それがタマシイに深く刻み付けられちゃって、その絶望を毎回自殺って形で表に出すようになったの。
そこら辺が私たちの不手際ね。
ね、もう結構時間遅いけど大丈夫なの？」
「え、そろそろ夕飯の支度しなきゃまずいな。あ～、でも買い物行くんだったのに。材料がない」
その言葉は意外だった。普通、そういう家事はお母さんがやってくれるものなんじゃないだろうか。
「夕飯自分で作るの？」
「共働きで父さんも母さんもあんまりうちに帰ってこないしな」
「そ～なんだ。ねぇ、ところでエミリア。ウチには食料あるのよね？」
「あるわ」

もしなかったらどうしよう、と思っていたからそれはありがたかった。
「じゃあウチで食べてけば？買い物行けなかったのあたしたちの所為（せい）でもあるんだし」
「それなら」
そんな感じで話がまとまり、彼はウチで夕飯を食べた後、片付けを手伝ってから帰っていった。
あたしはエミリアにこれから暮らしていくにあたって必要なことを教えられ、その後エミリアも帰っていった。
お風呂に入ってベッドに横になっていた時、あたしは、あれ自殺するんじゃなかったっけと思ったけれど睡魔に負けて眠ってしまった。

第二話：登校初日

「三年はA組、B組、C組、D組の四クラス。水瀬はその内のB組だ。この教室になる」

そう言うと、これからあたしの担任になる秋畑(あきはた)先生は教室の扉を開けた。

一応あたしは、エミリアの言う通りに学校に来ていた。

来る予定じゃなかったけれど、一回くらい顔を出してみるのも悪くないかと思った。そんな気まぐれ。

教室の中では先生が、転校生がいることを話していた。

「水瀬」

その声とともに先生は軽く手招きする。

最初の前置きは終わったらしい。軽く頷いて教室に入る。

「水瀬紅理です。これからよろしくお願いします」

短く挨拶し、軽く頭を下げる。

「水瀬の席はあそこだ。隣は学級委員だから、遠慮なくこき使って構わない」

空いている席の隣、学級委員と紹介された男の子が抗議の声を上げる。

「先生、ソレ俺に対する配慮が足りない」

あたしはその男の子を見てビックリした。彼は昨日会ったお隣さんだったのだ。

「え？」

「昨日のお隣さんって今日の転校生だったんだな」

彼の声に皮肉のような響きがあるのはきっと気のせいではないだろう。でも、断じてあたしの所為(せい)じゃない。そんな目で見られても困る。

「何だ、お前ら知り合いか？」

「偶然同じマンションの隣の部屋で……」

先生の質問に曖昧に答えた。
「ふーん。なら丁度良いかもな。じゃあ水瀬、席につけ」
「はい」
何がどう丁度良いのかさっぱり分からない。寧ろ悪すぎると思う。バラされたら即刻、救急車で精神科に連行されちゃうようなヤバイ秘密を知られてる相手が学級委員で席が隣って、最低の状況だ。しかも、何気にコイツは顔の造作も良いから女子にモテるんだろう。その証拠に女子からの視線が痛い。
「最低……」
席に着くなりぼそっと言った。もう先生は別の話を始めてるから周りに聞かれる心配はない。隣は別として。
「こっちの台詞だ、それは。面倒事は起こすなよ。迷惑はかけるな」
そのムスッとした言い方に、思わずムカついて言う。
「何よ、それ。いいのよ、あたしもう学校来ないもん。不登校になってやる」
「やめろ。絶対説得して学校につれて来いって言われる。そんなめんどくさいことできるか」
「無視すればいいでしょ。説得しろって言われた時に、本当はしないで、説得したけど来なかったことにしとけば何の問題もないじゃない。口裏ぐらいは合わせるけど？」
「却下。俺が失敗したことになるだろ。問題あり」
折角の妥協案にべもなくそう返すヤツに、ちょっとだけ殺意を覚える。
「はぁ？あんたのその上から目線の態度どうにかなんないの？かなりムカつくんですけど」
「どうにもなんないね」
ヤツがそう言った時、先生がホームルームの終わりを告げた。
「起立。礼。ありがとうございました」
「ありがとうございました」

ヤツの号令に合わせて終わりの挨拶をした。何だかちょっと癪だ、ヤツに合わせるなんて。

挨拶が終わった途端、ヤツはスッと教室から出て行った。何でだろ？とぼんやりと考えている間に、いつのまにかクラスの女子に囲まれていた。ご苦労さまなことに、クラスのアイドルの隣の部屋に住んでいるという女を尋問しに来たらしい。言葉にしてはいないけれど、何となく同じ女として分かる、雰囲気というか、オーラというかを醸し出していた。さては、これを見越して逃げたな。薄情者め。

「ねぇ、宮間（みやま）くんちの隣に住んでるって本当なの？」

一瞬、宮間って誰？と思ったが、すぐにあのいけ好かなすぎるヤツのことだろうと察した。

「本当だけど」

「宮間君とは仲いいの？」

「別に、単なるお隣さんで、クラスメイトなだけ」

リーダー格と思われる女子が最後に高圧的に言い放った。

「そう。間違っても、自分が特別なんて思わないことね。彼に対しては抜け駆け現金だから。あんまり目に余るようだと制裁を加えさせてもらうわ。だから覚悟しておいてね」

「はぁ」

あたしの気の抜けた返事が気に入らなかったのか、女王（名前が分からなかったから、勝手にあだ名をつけた）は苛立たしげに眉間にしわを寄せると、周りの女子を召使いのように引き連れて戻って行った。

一方あたしの方は、やっぱりという思いと、本当にこんなのあるんだという、二つの思いで呆けていた。もちろん、心の中で誰があんなヤツに対して抜け駆けなんかするかと毒づくことも忘れずにする。

それにしても、彼の名前さえ今まで知らなかったんだと、少し、意外に思った。

～＊～＊～＊～

宮間晴紀（みやまはるき）。それが彼のフルネームらしい。クラスメイトの名前を速く覚えられるようにと秋畑先生にもらった名簿を見ながら思った。

今思えば、昨日の夜はわりと穏やかに食事をしていたような気がする。それなのに名前さえ聞かなかったと思うと、何だか妙な気分になった。ねえや、おい、おまえなどの感嘆詞や代名詞で充分会話が成り立っていたから聞かなかったのだけど。

それに、何で今日は宮間君はいきなり喧嘩腰だったのか？最初に嫌味っぽいこと言われなければ、あたしもあんな物言いはしなかったと思う。

男の子って良くわからない。

今は六限の国語の授業中。隣の宮間君は先生や周りに分からないように教科書で隠しながら、文庫本を読んでいた。

外面は良く保ちたいみたいだ。まあ、中三のこの時期に外面を良く保ちたくない人なんていないだろうとは思うが、それにしても宮間君の本性はどう考えても腹黒なのに、あの周りや先生への振舞い方――常に微笑みを絶やさず優しく優しくしている、なんてどう考えてもおかしかった。二面性の三文字が頭の中をくるくる回る。

今日一日、これからのキーパーソンになるだろう宮間晴紀をずっと観察していた。あわよくば、弱味を握ろうと企んでのことだ。

でも、分かったことと言えば、過剰すぎるような気のする二面性だけだった。あとは心を許せる人はいないのかもしれないということ。本当の自分を見せてる人なんていなかったから。否、ひょっとしたら同じクラスじゃないのかもしれない。だから気付かなかった。

だったらいいと思う。心を許せる人がいないってつらいから。

この時は思わなかった。何もかもどうでも良かったはずのあたしが、だから自殺したあたしが、しっかり彼に関心を寄せているなん

τ。

第三話：欲しかった言葉

非常識天使エミリアに唆されて学校に通い始めてから早一ヶ月。
あたしは何故だか生きていた。
もう一回死んだら完璧に後はない。どんなに悔やんだってもう元には戻れない。自殺しようと決めた日、あたしはそれらの事実の対して、だから何？と思ったはずだった。なのに、今はそう思えない。
何故？
分からない。
何故？
どうして？
あたしは生きることに未練なんかなかったはずなのに。
答えの出ない問いを三週間ぐらいずっと繰り返している。最初は流されたのと、日々の生活の疲れで何も思わなかった。けれど、あるときふと気付いた。それからずっと考え続けている。
ベッドに横になり、天井を見上げる。溜め息をつく。
何をしても、どう思っても、この問いからくる憂鬱感はぬぐえない。
答えが出ない。
答えが出ない。
答えが出ない。
そう思いながら、あたしは眠りの中に落ちていった。

～＊～＊～＊～

「水瀬、お前授業を受ける気あんのか？」
授業中、文庫本を読んでいたあたしに宮間君が言った。
「その言葉そっくりそのままあんたに返すわ。あんたこそ授業受ける気なんか微塵もないでしょう」

同じく文庫本を読んでいる宮間君に言い返す。
もちろん二人とも小声だ。
「それにしても教科書もノートも机の上に無いって、そんなのやる気無さ過ぎだろ」
「家に忘れたって言ったでしょ」
本当は嘘だ。
机の中やロッカーの中が荒らされる事件が最近多発している。言うまでもないが、あたしにのみだ。
その被害にあってあたしの教科書とノートはボロボロだ。到底使えない、ゴミと化してしまっている。
エミリアに何とかしろと言ったら、
「しかたないわね～。用意する代わりにあと一カ月は自殺しようなんて思わないでよ～」
と言っていたから今日ぐらいには新品の教科書とノートが届くだろう。
多分宮間君ファンの仕業だ。女王たちだろう。
まったく疲れることしてくれるわ。
「アホだろう、お前」
「はぁ？アホはあんたでしょ」
反射的に言い返しただけだが、自分で全くだと思う。あんなファンがいるんだから、これぐらいのこと予想してしかるべきでしょうに。
「では、今日はここまで。学級委員、号令」
その時、先生がこう言った。
「起立、礼。ありがとうございました」
号令が終わったら、さっさと席を離れる。次は体育だ。着替えなければならない。
ロッカーを開ける。
体操服が、ない。
予想の範囲内ではあったけど、まったく。

一応奥までゴソゴソ探してみるが、やっぱりない。
「クスクス。あんな必死になってロッカーかきまわしちゃって。バッカじゃないの」
後ろからムカつく声がする。思わず切れそうになるけれど、必死なって冷静なふりをする。
全っ然必死じゃないし！
あんなの別に痛くもなんともないでしょ。大体あたし、こういうことには慣れてるし。別に平気よ。
やがて女王とその召使いは更衣室に去っていった。
誰もいない廊下に立ちつくして、どうしようと考える。
「は、どうしようもこうしようもないわね。先生に体操服忘れたって言うしかないか」
自嘲気味に言う。
のろのろと職員室に向かう。
足が、重い。
「水瀬？お前何でまだ制服なんだ？」
ぼーっと歩いていたあたしに、突然声がかけられた。宮間君だ。
どうやら職員室に体育館の鍵を取りに来たらしい。
「体操服忘れたの」
短く答えると、宮間君な顔をしかめた。
「お前、最近忘れ物しすぎだろ。やっぱり、ひょっとして……」
宮間君、気付いた？というよりも気付いてた？
「忘れたの！」
遮るように声を荒げて、走り出す。
馬鹿だな、こんなことして。逃げたりしたら肯定してるようなものなのに。
混乱気味に考える。
「おいっ！水瀬っ！待てよっ！」
走ってきた宮間君に手を掴まれて、無理やり振り向かされる。
「小笠原にやられたんだな？体操服、教科書、ノート、他になん

かあるか？」
「忘れたって言ってるでしょ！小笠原さんは関係ないわよ！」
小笠原というのは女王のことだ。
「お前は馬鹿かっ！！こんな怪しすぎる状況で、忘れたって言われても誰が信じるんだよ！」
宮間君に怒鳴られて、うつむいた。
そのまま手をひかれて職員室に行き、宮間君が体育の先生に
「水瀬さんが具合が悪いそうなので保健室に連れて行きます」
と言い、保健室に連れて行かれる。
「授業サボる気なの？」
小さな声で尋ねると、当然と返ってきた。
「作戦会議だ。今の時間、保健の先生いないしな。保健室ならうってつけ」
「別にあたしのことなんだし、一人で平気だから」
「俺の所為だろ。俺のファンがやったことなんだから、俺の所為だ。先生来ないと思うけど、一応ベッド入っとけ。偽装だ」
あたしがごそごそとベッドに入ると、宮間君は尋ねた。
「で、具体的にいつから、どんなことされてたんだ？」
「転校してきて一か月ぐらい経ったころから、上履きに画びょうとか、ロッカーや机が荒らされるとか、不幸の手紙もどきが下駄箱に入ってるとかありきたりな嫌がらせがあっただけ。だから作戦会議なんて必要ないし、宮間君は授業に出て」
か細い声で訴えてみたが、宮間君には一刀両断された。
「ありきたりな嫌がらせがあっただけ、じゃないだろ。つーか、古典的な嫌がらせのフルコースじゃん。だけ、とか言うな」
「別にこれぐらい平気だし」
「まだ言うか。ていうか俺は、お前はこういうこと会ったときは自分のファンはしっかりしつけろ！って騒ぐタイプだと思ってんだけど。何で何も言わないんだよ」
宮間君の言葉にえ、と一瞬固まる。

「……だって。言ったら迷惑でしょ」
そう言うと、宮間君は驚いたようにあたしを見つめ、それから言った。
「迷惑じゃない。それに、お前のほうが迷惑してただろう。ひょっとして、頼ったり甘えたりするみたいで抵抗があったんじゃないのか？」
「そ、それは……」
図星をさされ、言葉をにごす。
「まあ、今までの境遇考えれば仕方ないかもしれないけどな。お前のトンデモ告白を信じるなら、父親は浮気して家に帰ってこないわ、母親には虐待されるわで、最後は嫉妬に狂った母親が父親を殺してるところを目撃してジ・エンドとかいう悲劇的としか言いようがない過去だし」
「昼ドラも真っ青なドロドロ加減よね」
あたしが自嘲するようなちゃちゃを入れると、宮間君はあたしを睨み黙らせてまた話しだした。
「そんなんじゃ人に頼るなんて論外だっていうのは、何となく分かる。でも、今はあの頃とは違うだろ。必死で弱ってるの隠すなんて真似、もうするな。見ててこっちが痛い」
「別に弱ってなんかない。これぐらい、もう慣れっこよ」
反射的に言葉がこぼれた。
別に弱ってなんかない、それはあたしの本心だった。あたしはこんなことくらいで傷付いたりはしない。慣れているから。
「慣れれば傷付かないってわけじゃない。大体、嫌がらせに慣れてどうする。
自分が傷付いてるのぐらい、認めろ。哀しいと思ってることぐらい分かれよ。
今はもうあの頃とは違う。それぐらい認めたって、分かったって平気だし、誰かを頼ったっていいんだよ」
怒っているように宮間君は言った。そして幾分優しげに、小さな

声で言う。
「まあ、あれだ。ご近所さんのよしみで頼られてやるよ。だから、これからは俺に言え。何かあったら絶対言え」
ぽんと額に手を置かれる。
びっくりした。
泣きたく、なった。
何で分かるの。
あの頃、本当に分かって欲しかった頃には誰も気付いてくれなかったのに。
何で。
そんな欲しい言葉ばっか言うのよ。
「平気よ。あたし結構、負けず嫌いだからね。死ねとか学校来るなとか書いた紙、下駄箱に入れられたりすると意地でも生きて毎日目障りに学校に来てやるって思うから。
前は意地とかそんなの張ってる余裕もなかったから、これでも大分マシなんだよ？一回死んで、少しぐらいは吹っ切れたのかもね」
けど、素直に認めたりなんかできない。強がるのがあたしの普通で、標準装備だし。
「天の邪鬼な奴だな。そこは素直に泣いとけよ」
飽くまで平気だと言い張るあたしに、呆れたように宮間君は言った。
泣かないよ。泣いたら、多分泣きやめなくなっちゃうからね。
そう言おうとして、でも言えなかった。
代わりに情けない嗚咽がもれる。
「っ、ふっ、うぅっう」
「そうそう。泣いとけ。素直が一番」
宮間君の優しい声が耳に心地よい。
でも泣く予定じゃなかったあたしは少しパニックで、混乱していた。
もう、泣いたりとか、強がらないとか、できないと思ってたのに。

どうして。
顔を見られたくなくて、額にのせられていた宮間君の手にすがって泣いた。
宮間君はあたしが泣きやむまで何も言わずに、ずっとそばにいてくれた。

凍らせた心が少しだけ、本当に少しだけだけれども、融けた気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8226e/

もう一度めぐるタマシイ

2010年11月21日14時58分発行